

〔翻訳〕

スポーツ史の「新たな方向」をめぐる クリスティアーネ・アイゼンベルクと ミヒャエル・クリューガーによる誌上論争

有賀 郁敏*

【訳者解説】

本稿はドイツの学術誌、『スポーツと社会——スポーツ社会学，スポーツ哲学，スポーツ経済学，スポーツ史のための学術誌』（Sport und Gesellschaft — Zeitschrift für Sportsoziologie, Sportphilosophie, Sportökonomie, Sportgeschichte）創刊号（2004年）に掲載されたクリスティアーネ・アイゼンベルク（Christiane Eisenberg）ならびにミヒャエル・クリューガー（Michael Krüger）の論文の翻訳である。それぞれの論文のタイトルは以下のとおりである。

- ・クリスティアーネ・アイゼンベルク「スポーツ史における社会学，経済学そして『文化経済学』のアプローチ——新しい研究方向のための提言」（Soziologie, Ökonomie und “Cultural Economics” in der Sportgeschichte. Plädoyer für eine Neuorientierung, S. 73-83）（第1論文）
- ・ミヒャエル・クリューガー「ドイツスポーツ史の発展に向けた10の命題——クリスティアーネ・アイゼンベルク「スポーツ史における社会学，経済学そして『文化経済学』のアプローチ——新しい研究方向のための提言」に対するコメント」（Zehn Thesen zur Entwicklung der deutschen Sportgeschichte. Anmerkungen zu Christiane Eisenberg: Soziologie, Ökonomie und “Cultural Economics” in der Sportgeschichte. Plädoyer für eine Neuorientierung, S. 84-91）（第2論文）
- ・クリスティアーネ・アイゼンベルク「スポーツ史の対象範囲と政治的目標設定——ミヒャエル・クリューガーの『コメント』に対するコメント」（Gegenstandsbereich und politische Zielsetzung des Sportgeschichte. Anmerkungen zu Michael Krügers “Anmerkungen”, S. 92-95）（第3論文）

著者のアイゼンベルクとクリューガーに関しては、以前、本誌（『立命館産業社会論集』第44巻，第4号，2009年ならびに同45巻，第4号，2010年）において2人の別の論文を翻訳した際に簡単に紹介しているのでここでは省略したい。

さて，論文のタイトルが示しているように，2人の著者は誌上論争を繰り広げている。それもそのはずで，上記の3論文は本学術誌では「論争」として位置づけられている。ドイツにおけるこの種の学術誌において論争，討論，批評が掲載されることは決してめずらしいことではない。しかし，問題

* 立命館大学産業社会学部教授

提起—批判と反論—再反論といった形式で、論争の当事者が同じ学術誌しかも同じ号の中で論争を展開する事例を私は目にした記憶がない。しかも冒頭でも紹介したように本学術誌の創刊号である。ちなみに創刊号には編者による創刊の辞を除いて6つの論文が掲載されており、その半分が2人の論争に割り当てられている。

上記の理由の一端を創刊の辞に書かれている編集方針から読み取ることができる。本学術誌はスポーツ（の社会）科学の発展を目指す観点から、相互に関連する2つのアプローチを重視している。一つはスポーツ（社会）科学を構成する部分領域間の共同ないし連携である。本学術誌の副題、「スポーツ社会学、スポーツ哲学、スポーツ経済学、スポーツ史のための学術誌」は、端的にこの点を示している。しかしそれ以上に、第2に本学術誌はスポーツ（社会）科学と社会科学を架橋し相互に連携していくことも目指されており、しかもそれ（架橋と連携）は単なる比較や参照といった程度のもではなく、厳しい相互批判を媒介することが謳われている。『スポーツと社会』という雑誌名には、こうした編者らの期待あるいは意思が込められているのである。なお、この編集方針は創刊時の20名の学術委員会の構成（専門分野）でも裏づけられている。いわゆるスポーツ科学分野の委員は5名のみであり、その他の委員は社会学、教育学、哲学、民俗学、歴史学、政治学など多様な専門分野に属している（アイゼンベルクもその一人である）。

クリスティアーネ・アイゼンベルクが第1論文の中で着目しているポイントは、近代スポーツの競技特性としての競争を媒介にしたスポーツの商業化過程あるいはスポーツビジネスの歴史的展開であり、近代スポーツに表出された歴史実態と特質をスポーツの対象相関的な把握を通じて分析するよう提唱している。このようなアプローチは、産業化や国家の政治などの外因的要因からスポーツの歴史的性格を浮き彫りにしようとしてきた従前のスポーツ史研究とは異なる新たな方向であり、個々の消費のみならずスポーツクラブ、連盟、地域そして国家を巻き込みながらグローバルに展開するスポーツの商業化のメカニズムを把握し、スポーツ固有な力動性を評価できる点に著者は研究の優位性を置いている。そもそもドイツのスポーツ史研究がこのような対象相関的なアプローチに無頓着であった理由として、親学問たる歴史学の無批判な受容と従属関係があるとアイゼンベルクは診断しており、それゆえ本論文におけるドイツのスポーツ史研究者に対する氏の評価は手厳しい。もっとも、著者の論文を注意深く読めば自ずと理解できるように、アイゼンベルクはスポーツの内部世界のみを研究対象にせよと提言しているわけではない。氏が指摘するスポーツ史研究の新たな方向は4つの複合的テーマから構成されており、「スポーツと国家」「スポーツクラブと社会関係」「メディアとスポーツ」「スポーツと他の商品文化」といった視点に示されているように、スポーツを社会、市場、国家、グローバル世界と関連づけて捉えようとしている点で、いわゆるトリヴィアルなスポーツの種目史、ルール史、技術史とは位相を異にしている。

それに対して、ミヒャエル・クリューガーは、第2論文においてドイツにおけるスポーツ史研究者の立場からアイゼンベルクの提言に対し強い違和感を抱く。クリューガーはスポーツの対象相関的な把握に対して、たとえば第三帝国のスポーツ連盟役員による戦後の正当化要求に見られた「スポーツの独自世界」というイデオロギーの危うさを対置する。氏の指摘の力点は、この文脈ではスポーツの政治的純潔性に潜むイデオロギー的性格の暴露にあり、近代スポーツの商業化、経済化の歴史的な諸相をスポーツの対象相関的な視点から考察しようとするアイゼンベルクの視点とは幾分ずれが生じている。しかし、この段階ではスポーツの歴史的展開を社会や経済などとの位相でどのように評価し、叙述すべきかといった点で、論争における共通の土俵が形成されている。

ところがクリューガーは、そこにとどまらずドイツにおける体育・スポーツ史研究の学問的伝統と今日的展開へと話題を発展させていく。クリューガーは、このような研究史上の成果や苦悩、あるいは多様な場や主体によって取り組まれている今日のスポーツ史研究の実態を顧みようとし、アイゼン

ンベルクの分析手法にこそ、批判を集中すべきだと判断したのであろう。そして、ここに至ってアイゼンベルク論文との論理的な関連性や結節点が見えにくくなってしまった印象は否めない。アイゼンベルクが第3論文の中で、「2人の執筆者間の意思疎通が混乱している。彼らは相互にすれ違っているといった印象を読者に与えてしまう」と危惧した点と重なる。学問的論争の作法からすれば、提示された論理や命題の軸心に対する批判こそが要請されるのであり、クリューガー論文がこうした要請に十全に答えていないというアイゼンベルクの指摘はそのとおりである。しかし、アイゼンベルクがスポーツ史の「新しい方向」としてスポーツ社会学、スポーツ経済学との学際的な領域、すなわち「文化経済学（あるいはスポーツの経済学）」を重視するのであれば、たとえば文化（スポーツ）消費に孕まれる、ある種の文化的ヘゲモニーのありようも視野に入れるべきである。これは対象相関的な視点から政治的制約下のスポーツ固有（内在的）な「力動性」を考慮したとしても、否、考慮するがゆえに重要な論点となりうる。スポーツ固有な「力動性」と支配層による文化的ヘゲモニーとの関係、あるいはそれと反対に「力動性」を底辺で支えている民衆の文化的ヘゲモニーに対する抵抗や逸脱の契機を見逃してはならない。アイゼンベルクがスポーツ社会学との結節も視野に入れている以上、このような論点は重要であるし、おそらく両者の「論争」もより生産的な内容となったに違いない。

この点と関連して、ドイツにおける体育・スポーツ史研究の伝統や今日的展開に関するクリューガーの評価は的確にして傾聴に値する。なぜならば、これらの伝統や取り組みの中にスポーツ史研究の「新たな方向」を構想するための題材や論点が存在している可能性があるからであり、たとえば氏が第2論文で紹介した旧東ドイツのスポーツ展開を経済的な視点をも用いて考察したタイヒラーらの研究は、アイゼンベルクの「新しい方向」との対話が十分期待できるだろう。

アイゼンベルクが提起した「新しい方向」は、スポーツ史研究にとって未知の領域といえる事柄も少なくない。それは、スポーツ経済学やスポーツの商業化に傾斜しているように見えながら、スポーツと社会の関係把握といった点でスポーツ史研究者が常に重視してきた問題と結節する。クリューガーは第2論文の末尾に「スポーツのダイナミズムは、政治そして経済だけで解明することはできない。ダイナミズムはさまざまな条件とプロセスの相互依存のなかで、はじめて明らかにできるのである」と記しているが、この当然ともいうべき命題はアイゼンベルクの「新しい方向」と必ずしも矛盾するものではないと私は考える。なぜならばスポーツの対象相関的考察は、スポーツのダイナミズムの相互依存的な考察の前提にも結果にもなりうるからである。その意味でも2人の論争の精神を継承発展させなくてはならない。

私は『スポーツと社会』誌が日本に紹介される以前の2006年9月、ミュンスター大学の研究室で著者の一人であるミヒャエル・クリューガー教授から3つの論文を手渡された。氏の行為の趣旨は定かでないが、いつかこの論争の感想を私から聞いてみたいと思っていたにちがいない。すでに4年近くが経過した今、ようやく翻訳という形で日本の読者に論争を紹介できるようになった。2人の論争は、ドイツのみならず日本においても課題として位置づけられ、深められなくてはならないものであると確信している。

最後に、本論文の日本語への翻訳と本誌への掲載を快諾して下さった、クリスティアーネ・アイゼンベルク教授とミヒャエル・クリューガー教授に対し、心から感謝申し上げたい。

スポーツ史における社会学，経済学そして 「文化経済学」のアプローチ —新しい方向のための提言—

クリスティアーネ・アイゼンベルク* 著
有賀 郁敏** 訳

近代スポーツは競争，より正確に言えば独立した「第3の利害関係者」——すなわちスポーツ種目の管理当局——によって規制された友好的かつ共同的な競争の競技形態である。この「第3の利害関係者」はスポーツのルールと慣習を，場合によっては罰則を用いて貫き，また外部の妨害から競争を隔離することにより，外部世界と分離したスポーツの現実の領域——競技にみられるように——を確保している¹⁾。確かにスポーツ的競技は包括的な社会における不可欠な要素である。しかしこの点は，領域の独自性を根拠に，スポーツにおける社会的諸関係が，なにほどかの考慮において「日常生活」のそれとは異なって展開するという事実を付与している。

たとえば，スポーツにおいて独占はほとんど意味がない。なぜならば，チャンピオンはタイトル挑戦者を，またタイトル挑戦者はチャンピオンを必要とするからである。社会的不平等，ジェンダー的諸関係，そしてエスニックグループの境界は他の社会領域とは異なっており，ま

たそれらとの比較において，それほど強靱ではない場合が多い。加えて競技の性格は不確実性を生み出す。というのは，スポーツはそれを真剣に行った時だけ，逆説的に喜びが生まれるからである。

人文社会科学における特殊な学問分野が，ここ数年来，一部はさらに数十年来，対象に関する幾つかの構造指標化に取り組んでいる。そのトップにスポーツ経済学とスポーツ社会学を挙げることができる。そして余暇社会学と新たな研究動向である「文化経済学」もこれに含まれる。文化経済学は社会学と経済学の学際領域で，芸術，文化そしてポピュラーカルチャーの機能様式の解明に取り組んでいる²⁾。これらの特殊な学問領域のなかでなされた全世界の研究——その中に歴史家のものもあるが³⁾——は，まさにその刺激的な特殊性ゆえにスポーツに引き付けられた。

様相をことにしているのがドイツのスポーツ史家（そして多くのスポーツ科学研究者）である。彼らは他の研究者と同様に研究対象に取り組んでいるのだが，その結果として，——ドイツのスポーツ科学の最古参であるオモ・グルーベ（Ommo Grupe）が批判しているように——

* フンボルト大学英国研究センター教授

** 立命館大学産業社会学部教授

「これらの論文や著作において、スポーツという言葉が経済あるいは流通によって置き換えられることが可能となった」（1995, S. 158）。この「正常化の取り組み」は、ドイツ連邦共和国の学問体系の中で、何十年も要したスポーツ科学の学問的認知をめぐる闘争を背景にしてのみ理解することができる。この闘争は常に、「親学問」の下でのスポーツ科学の個別学問領域をめぐる闘争でもあった⁴⁾。スポーツ史の展開——1960年代以降、ハヨー・ベルネット（Hajo Bernett）と彼の弟子たちは、歴史研究の標準（史料批判）と問題設定（さしあたり、特に政治史）の継承に貢献した——は、この点を典型的に物語っている。たとえ歴史学がスポーツ史家たちの関心に最近までほとんど返答しなかったとしても、歴史学はスポーツ史家にとって権威であり続けている。加えて、研究の欠陥（たとえば、サービス部門の軽視の下での工業化社会への一面的評価）や不適切な論争（たとえば、政治史的指標に基づく時期区分）も、スポーツ史家によって進んで受容された⁵⁾。したがって、ドイツのスポーツ史研究においては、一般的に近代スポーツの展開が政治・社会構造の反映として叙述され、他方で対象に固有な力動性ならびに形成能力が不十分なままの状況にあることは不思議ではない。

この欠陥はとりわけスポーツビジネスとの関係において際立っている。スポーツビジネスは経済的、社会的変化の動因として、これまでスポーツ史研究においても「親学問」である歴史学においてもテーマ化されてこなかった。それゆえ新しい方向性の探求は、とりわけドイツのスポーツ史研究においては、非常に遅れている。したがってスポーツ経済学、スポーツ社会学、余暇社会学そして「文化経済学」による成

果を埋め合わせ的に受容しようという以下の提言は、このような特殊事情と関係しているのである。つまり、新しい方向には次のような2つの期待が込められている。

1. 社会的、経済的視点に重点を置いた対象指向的な学問分野が、研究に新たな視点をもたらすこと。
2. 新たな視点は従前の研究と結合されうること。

これらの期待は、新規なものによって観察者を常に驚かすスポーツの性格的独自性——つまりスポーツの固有なダイナミズムを有する成長能力——に照らして、以下、具体的に検証されるべきであろう。

1. スポーツの成長——対象相関的な解釈

歴史家は19世紀以降、民衆の間に高まったスポーツ需要を、概して「外因的」な要因に求めてきた。すなわち、20世紀における余暇時間の増大、西側社会の幸福、そして市民の顕著な健康増進志向、政治的利害関係や公的資金による助成を通じた促進などである⁶⁾。これに対して、特殊学問領域が提供する説明は、「内因的」な成長メカニズムを強調する。この見解はスポーツを消費財と見なすときに生まれる。すなわち：

需要サイドにおいて、第1の成長メカニズムはスポーツ消費が余暇消費の変種であるという点から成立する。それは、衣食住といった基礎的な必要——確かにそれは生活水準に応じて異なるものだが、しかし原則的にいって制限がある——に寄与するのではなく、気晴らしをする、刺激を与える、あるいは自身のために行うといった点に貢献すべきものである。それゆ

え, スポーツの需要は, 傾向的にみて「食欲」なのである。(Gratton & Tayler, 1985, S. 58ff.; Scitovsky, 1989, S. 34ff.)

第2の成長メカニズムは, スポーツの需要が「消費者技術」の習得を通じて刺激されることに起源を求めることができる。つまり, ある事柄について消費すればすれほど, またそれゆえその事柄について知れば知るほど, 将来的にもますます消費したくなるのである。したがってスポーツ消費は, すでに玄人である者が特にたしなみ方を心得ているクラシック音楽や高級文化の他の商品の消費のようなメカニズムに基づいて成長する。このようにして, スポーツ消費は直接的な欲望の充足とともに, 将来の満足感を高めるための基盤も提供しているのである。(McPherson, 1975, S. 256f.)

内的成長の第3の解釈では以下のことが明らかになる。すなわち, スポーツの中で生じた情熱や共同感情(愛郷心, スター熱など)が, 時として商品の品質悪化にともなう需要の減少を遅らせるか, あるいは妨げることである。スポーツの多くの顧客は「ファン」——この言葉は「ファナティクス」の略語である——として見なされ, 彼らは概してコスト・有用性・計算を断念する。この需要サイドの失望の抵抗力は, 国家にとっても近代社会におけるスポーツの最も重要な「共同消費」の一つとして見なされる。すなわち, 政治家や官僚は地元のアスリートの失敗が, 彼らが予定していた助成金を外国に譲り渡すことで報いられる点など思いもつかないであろう。

こうした需要側の視点からの証拠は, その補完物を「提供側の視点」のなかで見出している。ここからスポーツ消費の成長にとっての第4の解釈が明らかになる。すなわち, 人びとの

スポーツへの好意の増大を満たすことは, 比較的疑問の余地がないという点である (Neale, 1975, S. 217ff.)。というのは, スポーツ的な「イヴェント」それ自体ではなく (それは国内選手権, ヨーロッパ選手権そして世界選手権, ならびにオリンピック競技でも不可能であろう), その消費の前提だけが複製されなくてはならないからである。「ライブイベント」を競技者あるいは観衆として共にしたい者のために新しいスポーツ施設が作られ, 新しい装備が購入され, そして補足的な座席, 立見席が造られなくてはならない。メディアによるスポーツ消費のために, 印刷物と送信線が供給され, 人工衛星が打ち上げられ, そして特別なスポーツチャンネルが設けられなくてはならない。

財政の工面は根本的な問題とならない。なぜならば, 支出は消費者, つまり競技者と観衆だけを対象としていないからである。無限な成長の見通しゆえに, スポーツに対して間接的にしか興味を抱いていない投資家にとっても, この財政支出は魅力的なのである。供給者には伝統的な政党, 都市そして国家も含まれる。これら供給主体は正当性の調達, イメージ育成の理由から競技場を建設し, インフラ整備を引き受け, 信用を保証する (Rosenstrauch, 1997)。そしてさらに, 消費財の企業からなる多くの「オフィシャルスポンサー」が加わる。これら企業は構造化された聴衆心理に適切に訴えかけ, えり抜かれた市場チャンスをものにするための優遇された機会を得るために, 設備とサービス, 販売と経営, 参加, 割引などのための独占権を確保するのである (Collins & Vamplew, 2000; Heinemann, 1989, S. 71; Mullin, Hardy & Sutton, 1993, S. 31ff., 45ff.)。メディアもまた, 結局のところ, スポーツ消費におけるスポーツ

外部の利害者に属している。その最も印象深い最近の事例は英国の放送局、BSkyBである。この放送局は1990年に破産寸前の状態にあったが、その後、プレミアリーグの放映権の獲得を通じてヨーロッパのサッカーで最も利益をえた放送局へと発展した（Gratton, 1998, S. 104; Williams, 1994）。このスポーツ外部の利害者から集められた投資は、数10億〔ユーロ〕に達し、持続的に増大している。その理由はクラブ、連盟そしてリーグが多数の潜在的利害者を根拠に独占資本家として振舞うことができるからである。たとえば、ブンデスリーガへの放映権料は1988年から2000年の間に1400%も上昇しているのである（Path&Trosien, 1999, S. 143）。

スポーツの契約と結合した投資の期待が実際に満たされるのかどうか、あるいは、それらのうちの幾つかが最終的にスポーツの「共同顧客」として等級分けすることはできないかどうかは、依然として確定できない。スポーツ経済学的な研究はまだ緒についたばかりである（Gleich, 1998; Heinemann, 1989）。しかしながら、以下のことを確認することは重要である。投資参加の利益は、いずれの場合においても投資家自身のみならず、それに加わらない第3者にも分け与えられることである。つまり、投資家がすべてを投資した競争あるいはリーグの生産物は特別なもののなのである。それはそれ自体として分割できないが、しかしコストの低い部分集合の中で消費されることができる。一つの事例は、郷土のテレビ画面で視聴者によって多かれ少なかれ「無料」で注目される公共あるいは民間テレビのスポーツ放送である。他方、スポーツ外の利害者——テレビ局、広告依頼者、権利所有者——は対価を支払うのである⁷⁾。さらに興味深い事例は、すべての人に注目され、

しかしそれに対して誰も支払うことのないリーグ順位表とタイトルをめぐる戦いである。この商品は非売品であり、また便宜的費用も生じない。しかしながら、ランキングの上下変動に関する情報の供給は、宣伝手段とともに視聴者収入に対しても有益な影響をもたらしている（Neale, 1964, S. 2f.）。

メディア、コマーシャル、放映権請負人、そしてスポーツビジネスの他の関係者は、結果として別々の作用を及ぼしている。すなわち、個々人の消費のための価格に補助金を出し、消費者を増やしているのである。発生した上昇率は、いずれにせよ供給側の投資意志を反映したものであり、したがって消費者の好みへの直接的な帰納的推察はもはや不可能である⁸⁾。スポーツの成長曲線は、それゆえ消費者好みの分析を通じてもはや分析できないのである。

2. 対象相関的な試みの優位性

このような対象と相関した研究の特殊性を考慮することが、スポーツ史家にとってどうして必要なのだろうか。対象相関的な試みは、いかなる研究上の優位性を持っているのだろうか。

スポーツにおける成長過程の事例をあらためて取り上げれば、最初の長所として次のことを挙げることができる。すなわち、スポーツは環境と関連した解釈の2つの構造的な問題——このような解釈の不十分な考察、ならびにそれと結びついた議論の勝手気ままさ——を補完することができる。歴史的調査における環境の影響は、資料の点に照らしてみると、一般的に相関関係の分析によるのではなく証拠のアピールだけに基づいている。それは常に確信をもっているわけではない。たとえば、なぜ社会的な幸福

や高まる健康志向がスポーツ参加の増大の中で表れるとされるのか。健康を意識した人びとは彼らのスポーツ活動（テレビスポーツ観戦を含む）を「理性的な程度」に制限することは当然なことではないのか。また、彼らがお金と自由時間を他の多くの楽しみごとに使用することは当然のことではないのか。そして、第一次世界大戦のような不自由な時代においてもスポーツが並外れて成長したことを、いかに歴史的所見の証拠と一致させることができるのか。

さらに対象相関的な試みにとって次のことを指摘できるだろう。内因的成長メカニズムへの着眼は国民的な典型あるいは発展の軌道を再構成するために、従前の解釈と問題なく結合することである。その逆は不可能である。つまり、外因的な成長要因に着目する者は、一般的諸関係に目をむけ、また対象固有な解説をもっぱら「唐突で不自然な解釈」として引き合いに出すだけである。なぜスポーツとスポーツ消費が時間を超越した展望の中で、たとえば合唱や弦楽コンサートよりも著しい高まりをみせたのかは、事柄への関連づけなくして答えることはできないだろう。

最後に対象相関的な試みのための研究戦略的観点がある。というのは、スポーツそのものに付着した成長メカニズムの考察は、スポーツ史家がこれまで首尾よく回避してきた問題、すなわちスポーツビジネスに本気に取り組むことを要求するからである。スポーツビジネスは、外因的、内因的諸要因が相互に密接に関連しあう体系的研究が可能であるばかりか、有効ですらある調査分野である。これから以下にドイツの事例をもって示されるように、そこからスポーツと政治、及びスポーツと社会の関係に対する新たな展望が同時に開かれるであろう。

3. ドイツのスポーツ史への新たな問いかけ

対象相関的な試みは、一般的にスポーツ科学、特にスポーツ史の新たな認識に対する強調を含意している。これまで「スポーツを行っている人」(Diegel, 1995, S. 146) が考察の中心であったのに対し、今やそのもとでローカル、ナショナルあるいはインターナショナルな諸関係におけるシステムが作動するような、システムとしてのスポーツの機能と構造的な枠組みの再構成が問題となっている。この具体的な範囲の中で行動する個人が副次的に視野に入る。この点はスポーツビジネスにとって次のことを意味している。すなわち、そこにおいてスポーツビジネスが誕生し、市場機会に加えられることになった特別な歴史的成り立ちに関する基礎的な情報が最初に調達されなくてはならないことである。それは手工業、産業あるいはインフォーマルなセクター（協会組織）から独立したものであったのか。スポーツ分野はどのようなスポーツ外の資金（たとえば、助成金、減税、公益規定）を利用することができるのか。それを通じて個々のスポーツ種目（たとえば、エリート種目対ポピュラー種目、競争に適した種目対適さない種目、テレビ向きの種目対向かいのない種目）の市場価値は変わるのか。市場権力（後援者、スポンサー）あるいは政治権力（軍隊、政党）を持っている、いかなる同盟者を買入手と利用者は頼りにすることができるのか。そして最後に、このようにして提供されたスポーツ消費の構造と行為操作によって、どのような倫理とメンタリティーが称賛され、公認されたのか（この点に関しては Miles, 1998, S. 128, 144）。

こうした新たなスポーツ史認識の強調と結合したテーマの多様さを概説するために、本稿の最後で、対象相関的な試みとして、以下に具体的な研究課題を例示しておこう。

第1の複合的テーマは、「スポーツと国家」の関係をめぐる新たな展望から生まれる。スポーツ史はもとより一般史においても、スポーツや他の余暇ないし文化供給に関する公的資金調達は、これまで政治史のテーマとして見なされてきた。国家そして地方機関の正当化欲求そしてそれと結合した公的な立役者（キーワード：宣伝、スポーツの政治的道具化）の自己演出の可能性が探求された。しかしながら、スポーツビジネスの視点が打ち立てられるとすぐに、公的そして法的な提供者と商業的提供者間の競合関係が浮き彫りとなり、政府、国家を支える政党（たとえばかつての東側ブロック）、軍隊、都市そして地方団体は市場アクターとして同一視される（Steinberg, 1987）。この視点から財政的な利益と国民経済的効果に関する問題も提示される。たとえば英国に対しては以下のような評価がある。すなわち、スポーツの国家的補助基金は、今日、スポーツによって獲得された税収よりも少なくなっている。また、個々の都市に対しても政府の費用・有用・計算（そして利益）を証明することができる⁹⁾。ドイツでも英国と同様なのか、あるいは過去においてすでにそうであったのかどうかについて、これまで体系的に考察されてこなかった¹⁰⁾。この点に関しては、このような研究が——とりわけスポーツにおける国家ないし公的な参加の表象的な意味ゆえに——文化政治そして政治的公共団体の文化的な近代化の全般的問題に対しても有効に門戸を開こうとしているがゆえに、なおさら残念なことである。

スポーツクラブとそこで成立する社会関係が、第2の複合的テーマを生み出す。これまで、スポーツ史はスポーツクラブ・体操協会ならびに他の任意の協会を、そのなかで身分、階級そして階層に属する構成員が個人として社会化されるブルジョア社会の特殊な基盤として見なしてきた。それは対人的な関係と政治参加の問題へ関心を集中させたが、他方で市場に関連する外部の活動やそれと結びついた組織的变化に関する考察はなおざりにされてきた。このような研究の欠落は、とりわけ進歩的な20世紀のスポーツ史にとって問題があることを証明している。なぜなら、IOCにしてもグローバルな領域におけるスポーツの市場化の主務機関として振る舞っており（Holderbach, 1998）、スポーツクラブや連盟にしても、ローカル、国内の分野で企業として活動しているからである（Trosien, 1994）。こうした点を背景にして、クラブと連盟課題の商業化は、組織の目的からすれば、個人会費よりも潤沢な資金をもたらす可能性がある、といった経験が生まれるのである。とりわけスポンサーとメディアへの所有権の販売は、第3者を供給側に参加させるための有効な方法として立証されている（Büch, 1996）。つまり、このクラブ研究の新たな強調に際しても、近代の市民社会における市民参加の前提と結果に関する考察が重要となるのである（Braun, 2001, S. 80）しかし、この試みはシステムの転換と活力をこれまで以上に強く考慮する必要がある。体操協会・スポーツクラブの商業的活動はいつ始まったのか。それは帝政以来絶えず発展してきたのか、あるいは時々中断されたのか。たとえば第3帝国や戦後初期の状況が問題とされなくてはならないであろう。協会の商業的な参加は会員資格の役割や名誉職に

として、どのような意義ならびに機能の変化をもたらしたのか。他の地方共同体との関係はどのように変化したのか。そして「スポーツを行う人間」は、どのように感じたのか。

第3の複合的テーマは、歴史家が常としてるように、メディアをスポーツ史の資料としてのみならず、とりわけスポーツビジネスの積分子として、また一般的にスポーツを形成する担い手としてみなす必要性から生まれる。こうした研究への関心の背景に世界的な衛星コミュニケーションシステムとその商業的利用の今日的経験がある。このメディアとスポーツビジネスの共同は以下のことに貢献している。すなわち、アディダス、ナイキのような企業や同種の国際的ブランドが世界的に宣伝を行うことである。それはさらに、オリンピック競技会、世界選手権そして他のスポーツイベントを地球のほとんど至る所で追いかけることを可能とする。その際、それは非常に急速な発展をとげるので、これまで地方という条件に制約されていたスポーツに対する好みは、世界の遠く隔たった地域において表面的に再生産される。マンチェスター・ユナイテッド、セルティック・グラスゴーは、今日すでにグローバルなサッカークラブとして見なされ、ニューキャッスル・ユナイテッドはタイに強力なファン層をもっており、アメリカのプロバスケットボールは205以上の国で中継されている（Gratton, 1996; Trosien, 1998; Jarvie, 2000）。この「ヴァーチャルなチームへの忠誠心」の現象がドイツにも存在するのかが問われなくてはならない。また、そこに歴史的な経過があるのだろうか。もしかすると、それはスポーツメディアによってもたらされる一般的な付随現象なのか。スポーツがまだテレビを通じてではなく、新聞、映画そしてラ

ジオによって消費されていたとき、このような現象は過去においていかなる具体的特徴を帯びていたのだろうか。メディアによって仲介された、このヴァーチャルなチームへの忠誠心は、そこに住んでいる「実在する」共同体といかに折り合いをつけたのであろうか。対立はあったのか。あるいはヴァーチャルそして自然のままの忠誠心は「恐ろしい結婚」に同意したのだろうか。

最後に第4の複合的テーマは、他の商品文化とのスポーツの「同質性」から生まれる。ドイツにおけるスポーツ史は、この間、研究対象を余暇消費の視点から体系的に考察してこなかったので、ふさわしい交換条件やその効果に関する重要な考察が未着手である。スポーツ史そしてスポーツ科学もまた、ここ数年来のポップ・ロックミュージックの文化形態へのスポーツの接近、部分的にはさらに両者の混交が存在することを、これまで見逃してきた。すなわち、ロックスターはオリンピック競技会の開会式の際に登場する。サッカークラブはエンターテイメント企業へと発展している。アスリートたちはスポンサーとメディアによってスターに仕立て上げられ、そして再び見捨てられる（Cowen, 2001; Rowe, 1995, S. 10, 102, 115ff.; Vamplew, 1998）。いくらか異なった関係が旅行産業、ファッション産業あるいは、いわゆるイベント・マーケティングとの間にある¹¹⁾。スポーツ史家はこの大衆文化的同質性の探求にも貢献することができる。スポーツと他のポピュラー文化現象の間に生じる力関係や「交換条件」は、形成されたスポーツビジネスの条件下でいかに変革されたかは、当然の問いであろう。その際、スポーツのイメージと意味内容は変化したのか。また最後に、スポーツは他の商業文化との交換

条件にもかかわらず、自立的、自己行動的な社会システムとして主張できたのだろうか。

以上紹介してきた事例は完璧な主張を唱えているものではない。それは、「スポーツについて」構想され、またスポーツビジネスを体系的に考慮にいれた試みの学問的な有効性を具体化するうえで貢献するにすぎない。それゆえ本稿を閉じるにあたり、次の提言を行いたい。ドイツにおけるスポーツ史はスポーツ社会学、スポーツ経済学そして「文化経済学」といった新たな方向性からの提案をさらに再生し、そしてスポーツ史の側でこれらの学問領域に関する新たな貢献を行うことである。スポーツ史はこのような方法においてこそ、自ら進んで選んだ、機能不全化した「親学問」としての歴史学の従属関係から解放され、また現在指向されている社会文化科学と同様、歴史学の学際的議論において自立的な研究の方向を主張できるだろう——それによって「親学問」もまた、いずれにせよ利益を得るのである。

注

- 1) 私は18, 19世紀の英国におけるこのシステムの形成について論じている (Eisenberg, 1999, 第1章, とりわけ56頁以下, 68頁以下)。
- 2) スポーツ・余暇社会学に関しては, Loy と Kenyon (1969), Hammerich と Heinemann (1975)。スポーツ経済学に関しては, Neale (1964) による古典的論文と近年刊行された Zimbalist の著作集 (2001), ドイツ語によるものは Heinemann の研究 (1984) がある。「文化経済学」に関しては, とりわけ最近刊行された Towse の著作集 (1997), さらに Throsby (2001) ならびに非常に読みやすい Cowen の著作 (1998) がある。また, スポーツ政治学も古くから要求されている。これに関して, 継続的な探究は, これまでスポーツの超国家的組織に対してのみ成果を発表してきた。Vgl. Güldenpfennig (2002)。
- 3) Vamplew の研究 (1988, S. 12) は, こうした研究に関する歴史家の貢献に値するものと評価できる。
- 4) この点に関しては, Diegel (1995) によって編集された著作集が視覚教材を提供している。
- 5) Vgl. Hajo Bernett のために編まれた記念誌所収の Spitzer と Schmidt (1986) と『スポーツの社会現代史』(1987-2000) ならびに『スポーツ時代』(2001年-)における論文。
- 6) Vgl. Schmidt (1995) によるドイツ戦後時代におけるスポーツ熱狂の解明。
- 7) 昨今, この不均衡から争いが生じている。供給サイドで代価テレビの導入の試みが行われる一方で, 需要サイドは「スポーツ報道への市民権」を盾に取っている。
- 8) 特徴的なことだが, 今日, ドイツにおいて約250のなじみのスポーツ種目の数だけが, 同時にテレビスポーツ種目に数えられる。数に関しては, Heinemann と Schubert (1994, S. 168)。
- 9) Vgl. Gratton (1998, S. 107)。また歴史的な事例は Tranter (1998, S. 64)。
- 10) Vgl. しかしながらドイツに関する Preuß (1998) の考察がある。
- 11) イベントマーケティングのコンセプトに関しては, Trosien と Dinkel (2000) 参照。

文献

- Braun, S. (2001), Bürgerschaftliches Engagement. Konjunktur und Ambivalenz einer gesellschaftspolitischen Debatte. *Leviathan*, 29, 83-109.
- Büch, M. P. (1996), Sport und Ökonomie — Märkte für den Sport und ihre wirtschaftliche Bedeutung in Deutschland. *Aus Politik und Zeitgeschichte*, B 29, 23-31.
- Collins, T. & Vamplew, W. (2000), The Pub, the Drinks Trade and the Early Years of Modern Football. *The Sports Historian*, 20 (1), 1-17.
- Cowen, T. (1998), *In Praise of Commercial Culture*. Cambridge/ Mass.: Harvard UP.
- Cowen, T. (2001), *What Preis Fame ?* Cambridge/

- Mass: Harvard UP.
- Diegel, H. (Hrsg.). (1995), *Sportwissenschaft heute*. Farmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.
- Eisenberg, C. (1999), *English Sports und deutsche Bürger. Eine Gesellschaftsgeschichte 1800-1939*. Paderborn: Schöningh.
- Gleich, U. (1998), Sport, Medien und Publikum — eine wenig erforschte Allianz. *Media Perspektiven*, 3, 144-148.
- Gratton, C. & 6 Taylor, P. (1985), *Sport and Recreation: an Economic Analysis*. London: Spon.
- Gratton, C. (1996), Transnational Corporations in the Leisure Industry. In M. Collins (Hrsg.), *Leisure in Industrial and Post-industrial Societies* (S. 145-167). Brighton: University of Brighthon.
- Gratton, C. (1998), The Economic Importance of Modern Sport. *Culture, Sport, Society*, 1, 101-117.
- Grupe, O. (1995), Uneingelöste Ansprüche. Die vergessene Interdisziplinarität. In H. Diegel (Hrsg.), *Sportwissenschaft heute* (S. 151-160). Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.
- Güldenpfennig, S. (2002), Plädoyer für eine Politikwissenschaft des Sports. In Zentrum für Europa- und Nordamerika-Studien (Hrsg.), *Fußballwelten. Zum Verhältnis von Sport, Politik, Ökonomie und Gesellschaft* (S. 65-86). Opladen: Leske & Budrich.
- Hammerich, K. & Heinemann, K. (Hrsg.). (1975), *Texte zur Soziologie des Sports. Sammlung fremdsprachiger Beiträge*. Schorndorf: Hofmann.
- Heinemann, K. & Schubert, M. (1994), *Der Sportverein. Ergebnisse einer repräsentativen Untersuchung*. Schorndorf: Hofmann.
- Heinemann, K. (1989), Sportsponsoring — Ökonomische Chance oder Weg in die Sackgasse? In A. Hermanns (Hrsg.), *Sport- und Kultursponsoring* (S. 62-77). München: Universität der Bundeswehr.
- Heinemann, K. (Hrsg.). (1984), *Texte zur Ökonomie des Sports*. Schorndorf: Hofmann.
- Holderbach, E. (1998), Das IOC als Instanz globaler Sportvermarktung. In G. Trosien (Hrsg.), *Globalisierung und Sport. Business, Entertainment, Trends* (S. 47-58). Aachen: Meyer & Meyer.
- Jarvie, G. (2000), Art. Globalization. In R. Cox, G. Jarvie & W. Vamplew (Hrsg.), *Encyclopedia of British Sport* (S. 154-156). Oxford: ABC-Clio.
- Loy, J. W. & Kenyon, G. S. (Hrsg.). (1969), *Sport, Culture, and Society. A Reader on the Sociology of Sport*. London: Macmillan.
- MaPherson, B. D. (1975), Sport Consumption and the Economics of Consumption. In D. W. Ball & J. W. Loy (Hrsg.), *Sport and Social Order. Contributions to the Sociology of Sport* (S. 243-275). Reading/ Mass: Addison-Wesley.
- Miles, S. (1998), *Consumerism as a Way of Life*. London: Sage.
- Mullin, B. J., Hardy, S. & Sutton, W. A. (1993), *Sport Marketing*. Champaign/VII.: Human Kinetics.
- Neale, W. C. (1975), Die eigenartige Ökonomie des Profi-Sports. Ein Beitrag zur Theorie des Unternehmens im sportlichen Wettbewerb und im Marktwettbewerb. In K. Hammerich & K. Heinemann (Hrsg.), *Texte zur Soziologie des Sports* (S. 204-219). Schorndorf: Hofmann.
- Path, T. & Trosien, G. (1999), Fußball als Fernsehprodukt. In G. Trosien & M. Dinkel (Hrsg.), *Verkaufen die Medien die Sportwirklichkeit? Authentizität — Inszenierung — Märkte* (S. 131-150). Aachen: Meyer & Meyer.
- Prueß, H. (1998), Ökonomische Implikationen der Ausrichtung Olympischer Spiele von München 1972 bis Atlanta 1996. Kassel: AGON-Sportverlag.
- Rosenstrauch, M. S. (1997), *Major League Losers: The Real Cost of Sports and Who's Paying for It*. New York: Basic Books.
- Rowe, D. (1995), *Popular Culture. Rock Music,*

- Sport and the Politics of Pleasure*. London: Sage.
- Schildt, A. (1995), *Moderne Zeiten. Freizeit, Massenmedien und "Zeitgeist" in der Bundesrepublik der 50er Jahre*. Hamburg: Christians.
- Scitovsky, T. (1989), *Psychologie des Wohlstandes. Die Bedürfnisse des Menschen und der Bedarf des Verbrauchers*. Frankfurt am Main: Campus.
- Spitzer, G. & Schmidt, D. (Hrsg.). (1986), *Sport zwischen Eigenständigkeit und Fremdbestimmung. Pädagogische und historische Beiträge zur Sportwissenschaft. Festschrift für Hajo Bernett*. Schorndorf: Hofmann.
- Steinberg, R. (1987), Nonprofit Organizations and the Market. In W. W. Powell (Hrsg.), *The Nonprofit Sector. A Research Handbook* (S. 118-138). New Haven: Yale UP.
- Throsby, D. (2001), *Economics and Culture*. Cambridge: Cambridge UP.
- Towse, R. (Hrsg.). (1997), *Cultural Economics. The Arts, the Heritage and the Media Industries*. Cheltenham: Elgar.
- Tranter, N. (1998), *Sport, Economy and Society in Britain 1750-1914*. Cambridge: Cambridge UP.
- Trosien, G. (1994), Zur wirtschaftlichen Lage von Sportvereinen in Deutschland. Zwischen Bedarfsdeckung und Gewinnorientierung. In G. Trosien (Hrsg.), *Die Sportbranche: Wachstum, Wettbewerb, Wirtschaftlichkeit* (S. 63-96). Frankfurt am Main: Campus.
- Trosien, G. (Hrsg.) (1998), *Globalisierung und Sport. Business, Entertainment, Trends*. Aachen: Meyer & Meyer.
- Trosien, G. & Dinkel, M. (Hrsg.). (2000), *Ökonomische Dimensionen von Sport-Events. Faktoren, Fallbeispiele, Folgerungen*. Butzbach-Griedel: Afra-Verlag.
- Vamplew, W. (1988), *Pay up and Play the game. Professional Sport in Britain 1875-1914*. Cambridge: Cambridge UP.
- Williams, J. (1994), The Local and the Global in English Soccer and the Rise of Satellite Television. *Sociology of Sport Journal*, 11, 376-397.
- Zimbalist, A. (Hrsg.) (2001), *The Economics of Sport*. Cheltenham: Elgar.

ドイツスポーツ史の発展に向けた10の命題 —クリスティアーネ・アイゼンベルク「スポーツ史における 社会学，経済学そして『文化経済学』のアプローチ ——新しい方向のための提言」に対するコメント—

ミヒャエル・クリューガー* 著
有賀 郁敏** 訳

スポーツ史家は、他のすべての研究者のように、その専門性、ディシプリン、研究対象範囲を批判的に吟味しなくてはならない。すなわち、どのようなテーマや問題を扱うべきか、どのような方法を用いてそれをよりよく叙述するのか、そのためにいかなる史料と経験的な証拠を使用しうなのか、どのような理論枠組みと研究の方向性が有効なのか、そしてとりわけ固有の学問的専門分野と他の学問分野との関係が解明されなくてはならない。スポーツ史の場合、もっぱら「親学問」との関係が問題となる。スポーツ史には、2つの親が存在する。このたとえはしっくりしないと思われるかもしれない。しかし、私はその比喻にこだわり続けたい。一般史はスポーツ史の親学問分野である。一般史は古く、由緒あるものなので、すでにそれはスポーツ史の祖母学問あるいは曾祖母学問とみなすことができるだろう。一般史は多くの子どもと孫そして曾孫がいるので、そもそもスポーツ

史を一つの正当な後継者と見なすべきかを確証すること自体、困難である。スポーツ史はまた、スポーツ科学の試験管ベビーとして見なすこともできる。このアカデミックな専門分野はスポーツ史と同様に非常に若く、伝統がないので、スポーツ科学とスポーツ史の親子関係のメタファーが反転しないかどうか問題とすべきである。

それゆえ、クリスティアーネ・アイゼンベルク——氏は一般史の中で頭角をあらわし、また数多の出版物、とりわけ氏の著作『英国スポーツとドイツ市民』によって、スポーツのテーマが一般史においても学問としてふさわしい研究対象として見なされることに貢献した——が前稿でスポーツ史の学問的、理論的課題や問題に関して立場を明らかにし、また専門分野の「新しい研究方向」へ向けた提案をおこなった点を歓迎したい。アイゼンベルクの論拠のよりよい理解、そしてスポーツ史の学問的、理論的立場をめぐる議論の深化のために、私は氏の分析視点ならびに具体的提案である「新しい研究方向のための提言」を、以下の10点において批判的かつ学問史的に論及したい。

* ミュンスター大学スポーツ科学インスティテュート教授

** 立命館大学産業社会学部教授

(1)

クリスティアーネ・アイゼンベルクは「ドイツにおけるスポーツ史家」（その際、公平性に鑑み、この批判に受けて立たすべき女性スポーツ史家もいることを断っておかなくてはならない）に対して明確に異議を唱えている。スポーツ史家は、たとえば英国における氏の研究仲間とは異なって、自覚的に「対象相関的」テーマ、すなわちスポーツに向き合うことなく、権威妄信的に「親学問」〔歴史学〕を見つめているのではないか、と。その結果、「近代スポーツの発展はドイツのスポーツ史研究においては、一般的に政治、社会構造の反映として見なされ、他方において研究対象に固有な力動性やその形成能力は、露出不足のままとなっている」と氏は論じる。別言すれば、氏のドイツのスポーツ史家に対する非難は次のようなものとなる。すなわち、平凡かつ愚直であり、近代の学問的議論の水準に到達しておらず、それらはスポーツという「対象」とその「力動性」を正当に評価する研究ではない（あるいは不十分である）、と。これらの批判はドイツのスポーツ史研究の中で、とりわけ軽んじられてきたテーマ、すなわちアイゼンベルクの言葉を用いれば、スポーツの領域におけるスポーツの商業化と経済化そして「文化経済学」の事例を用いて明らかにされている。

(2)

この非難はしかし、せいぜいのところ以下の点が適切である限りにおいて正当性をもつ。すなわち「ドイツのスポーツ史研究」において、

とりわけ現代史的な視点に携わり、国民社会主義、それ以前のワイマール共和国そして後のドイツ連邦共和国と東ドイツの時代におけるスポーツの政治的、社会的従属化と道具化を際立たせようと努力する、紛れもなく世論形成的、構造形成的な方向性があった、あるいはあることである。その際、次のことを理解し、考慮しなくてはならない。このようなハヨー・ベルネット（Hajo Bernett）、彼の弟子そして共同研究者によって学問的に特徴づけられた国民社会主義下のスポーツの政治史に関する重要かつ指標となるスポーツ史の成果は、1970年代まで支配的だったスポーツの「独自世界」のイデオロギー、すなわち政治、経済そして近代世界における他の文化領域とは別に展開するスポーツの生活世界の独自性と力動性という表象に対する一つの批判的解答でもあったことである。ベルネット、タイヒラー（Teichler）、プファイファー（Pfeiffer）、ブス（Buss）、ニツチュ（Nitsch）そしてとりわけ国民社会主義の文脈においてスポーツや労働者スポーツそして戦後のスポーツの現代史的問題を扱ってきたその他の研究者たちは、スポーツの独自性——要するに常にアマチュアスポーツが考えられた——の命題に疑問を投げかけてきたのである。そしてこの試みは成功した。スポーツが常に「政治的であること」は自明であったし、当然のことである。仮にクリスティアーネ・アイゼンベルクの勧めに従うならば、スポーツがその政治的純潔さをなお失ってはいなかったと信じた場合、それはある意味では、こうした時代への逆行を意味する。このことは可能でも、好ましいことでもない。いわゆるベルネット学派の決して軽視してはならない成果は、近代のスポーツ展開における政治的、社会的な網目の結合を解明してきた点にあ

る。

（3）

アイゼンベルクがスポーツ史家について語るとき、最初にドイツにおけるスポーツ史家とは誰なのか、また過去においては誰だったのか、ドイツにおけるスポーツ史はどのような伝統を保有しているのかを問うべきである。ドイツのスポーツ科学におけるスポーツ史のアカデミックな分野は、スポーツ科学が学際的な性格をともなったアカデミックな分野として大学に誕生した1960年代後半と70年代以降、存在している。スポーツ史はこの学際分野としてのスポーツ科学のなかで、従属的とまでは言わないまでも、側面的な役割のみを演じてきたし、演じている。なぜならば大学における学問としてのスポーツのアカデミックな「貴族化」の最も重要な根拠は、なんといってもドイツにおけるスポーツそして高競技力スポーツの近代的発展を科学的にサポートし、促進させることの中に存在していたからである。1972年のミュンヘンオリンピック競技会の開催が決まり、若い新しいスポーツという学問はそこから大きな利益を得ることになり、加えてスポーツは東西ドイツの対立の中で冷戦下の誤って考えられた武器として科学的にも武装された。東ドイツではスポーツ史もそれに貢献した。というのは、スポーツ史はイデオロギー的な競争指導の手段として利用できたからである。西ドイツでは科学技術と教育学をより重視したが、西ドイツのスポーツ科学はスポーツ史をこのスポーツ科学の部分領域として位置づけ、発展させた。それはとりわけ、トゥルネン、トゥルネン文献学そして身体教育の伝統に由来し、戦後「身体教育の理論」

や後にスポーツ科学を大学で代表していた教授たちによってなされた。ハヨー・ベルネットはこの世代の事例である。彼は専門的な歴史家ではなく、とりわけ個人的、伝記的な動機から、自身の専門の過去を批判的に再生することに貢献したかった身体教育者、スポーツ教育学者として理解された。6巻の身体運動の世界史の編者であるホルスト・ユーバーホルスト（Horst Ueberhorst）は、新分野であるスポーツ科学の中に根をはった、さらに新しいドイツスポーツ史研究の成果を示す優れた第2の事例である。2つの講座（C3）——正教授の講座ではない——はベルネットとユーバーホルストの退職後、再びスポーツ史家によって占められなかった。同様の運命を東ドイツ崩壊の東地区のドイツにおけるスポーツ史教授職も経験することになった。結果的として、今日、ドイツにおいてはスポーツ史の正教授の講座（C-4 講座）は一つ、つまりケルン体育大学の中にあるだけである。それは年配のスポーツ史家によって占められている¹⁾。スポーツ史はもっぱらスポーツ科学の中で、またスポーツ教育学の部分領域におけるスポーツ教師養成の枠組みの中で定着している。要するに、スポーツ史はドイツにおけるスポーツ科学の中で独自の部分領域としてもはや代表できなくなっている²⁾。それはスポーツ科学の複数の教授が、一部は専門的かつきめ細かくスポーツの歴史を扱っているにもかかわらず、である³⁾。

（4）

スポーツ科学分野の創設は——その代表者たちはその中で「スポーツ」という研究対象が包括的かつ学際的に、つまり歴史的にも論じられ

ることができる学問を発展させたいと要求しているが——ドイツのトゥルネン史叙述と身体運動の歴史研究におけるこれまでの一連の伝統を機能停止に追い込むという結果をもたらした。そうした伝統は、19世紀以来、歴史家、文献学者そして研究者によって取り組まれてきたものであり、彼らはトゥルネン、トゥルネン運動そしてスポーツの課題に真剣に打ち込み、身体運動、体操、トゥルネン、遊戯そしてスポーツを歴史的にも正当化するために貢献したのである。例を挙げれば、オットー・ハインリヒ・イエーガー（Otto Heinrich Jaeger）からフリードリヒ・アルベルト・ランゲ（Friedrich Albert Lange）を経由してカール・オイラー（Karl Euler）、そして——20世紀における——エドムント・ノイエンドルフ（Edmund Neuendorff）までの「トゥルネン文献学者」、さらに古代ギリシアのスポーツ史、古典古代における体操と競技者の歴史のパイオニアである、ユリウス・ユットゥナー（Julius Jüthner）やフリードリヒ・ブライン（Friedrich Brein）が存在する。1920年代にルドルフ・ガッシュ（Rudolf Gasch）によって新たに出版された『トゥルネン総覧ハンドブック』のような優れたスポーツ史的な著作、あるいはノイエンドルフによる4巻からなる『新ドイツ体育史』、1926年にボーゲンク（Bogeng）によって編集され、今日まで類例のない『すべての民族と時代のスポーツ史』もまた、ドイツのスポーツ史研究のこれら偉大な伝統の典型的な表れである。それらはクリスティアーネ・アイゼンベルクが今日要求しているもの、つまり近代の新たな生活領域——スポーツ——の文化的力動性を浮き彫りにしようとする努力によって担われてきたのである。

（5）

つまり、ドイツのスポーツ史叙述の展開はアイゼンベルクが提示した事柄とはまったく異なって推移してきたのである。19世紀のトゥルネン史家とトゥルネン文献学者以来、ドイツにおけるスポーツ史家は「一般史」の内容と方法への適応を通じて際立ったのではなく、むしろ彼らがこれら生活範囲の歴史的次元と文化的意味を浮き彫りにすることを通じて、文化における体操、トゥルネン、遊戯そしてスポーツという研究対象の掘り所の特徴をめぐって、ボーゲンクによる巻のタイトルにあるように「すべての民族と時代」のために努力してきたのである。すでに見てきたように、彼らはまた、20世紀の一般史学が政治史から文化・社会史へのパラダイム転換を経験するうえでささやかな貢献を行ったのである。なぜならば、政治の偉人たちだけが世界の進展を決めるのではなく、多くの大小の歯車がそれを動かすために互いに関与していることを、もはや見逃すことはできないからである。スポーツは本質的な意味において、その中の一つといえるのである。

（6）

スポーツ科学が1970年代初頭までに創設されると、いわゆる親学問の代表者は「スポーツ」という研究対象への関心をますます減少させるという結果を招いた。その理由はスポーツを学問的に大学で研究する完全な分野が誕生したからである。換言すれば、「身体教育」について意見を述べた1920年代そして30年代のヘルマン・ノール（Hermann Nohl）あるいはエデュ

アルト・シュブランガー（Eduard Spranger）に匹敵するような人物は存在しなくなり、今やこの課題は職業としてのスポーツ教育学者がスポーツ科学のなかで取り組むことになった。たとえスポーツ教育学がスポーツ科学の中で尊敬に値する研究成果を提供しているとはいえ、教育学のハンドブックや事典の中にスポーツに関する事柄を見つけることは非常にまれである。同様なことはスポーツ史に当てはまる。スポーツ史への一般史家の遍歴は、1990年代まで非常にまれであり、また近年になってようやく「スポーツ」という研究対象への専門史家の関心が再び増大してきた。その理由は「社会史」の新たなパラダイムが、今や生活によって満たされねばならないからである⁴⁾。（僅かな）スポーツ史家は彼らの側で、スポーツテーマの社会的、そして社会史的な組み入れに努力してきた。その際、いずれにせよさまざまな時期の専門家を区別しなくてはならない。すなわち古代スポーツ史は、常にそして今日まで古代史家と考古学者が取り組んできたテーマを維持してきた。この点は、ユリウス・ユットウナーからインゴマー・ヴァイラー（Ingomar Weiler）、またエルンスト・クルティウス（Ernst Curtius）、ヴィルヘルム・デルプフェルト（Wilhelm Dörpfeld）からウルリヒ・ジン（Ulrich Sinn）まであてはまる。スポーツ領域でのより新しい、現代史的研究はこれとまったく様相を異にする。たとえば、ハインリヒ・フォン・トライチュケ（Heinrich von Treitschke）が19世紀にヤーンと彼の時代を論じたように、クリスティアーネ・アイゼンベルクの著作が発表されるまで、一般史の中に「スポーツ」という研究対象に集中的に取り組んだ者は存在しなかった。スポーツ史がスポーツ科学抜きに効果的に進めら

れてきたことは、他国の事例が示している。これらの国は、確かにドイツのように高度に細分化されたスポーツ科学を利用できなかったが、しかし、たとえばアメリカ合衆国のように、スポーツ史的に見た場合、非常に生産的である。アレン・グットマン（Allen Guttman）、リチャード・マンデル（Richard Mandell）、そしてジョン・ホバーマン（John Hoberman）はスポーツ史家ではなく、アメリカ研究者、ドイツ研究者である。

（7）

結果として、最近になって「スポーツ」というテーマを扱った（スポーツ）史料編纂的に興味深い変化が生じてきた。すなわち、一般史家は（再び）スポーツのテーマに専念し、またスポーツ史家は歴史学や歴史理論からの刺激を汲み上げようと試みている。彼らは社会史、身体史、国民史、文化史などの中で遭遇する。しかしながら、このような現象は問題なく生じているのではない。なぜならば残念なことに先行研究の成果が必ずしも十分には認められていないからである。2つの事例を示しておこう。最初の事例はクリスティアーネ・アイゼンベルク自身の著作、『英国のスポーツとドイツ市民』にあてはまる。それはドイツと英国のスポーツ史に関する手堅い著作ではあるが、しかしドイツのスポーツ史研究の成果、つまりトゥルネン史及びスポーツの現代史に対する考慮抜きに概括的かつ画一的に叙述されている。この点は、アイゼンベルクによって言及され、その本質において正当化することはできない「ベルネット学派」に対する批判にも該当する。ハンス・ヨアヒム・タイヒラーもまた、アイゼンベルクの著

作の書評の中でこの点に立ち入って論じている。彼女はトゥルネン史の叙述に際して、過去のトゥルネン史研究に対する十分な考慮を省いたのみならず、比較的最近公表されたトゥルネン史研究の成果との詳細な討論を断念したように思われる。私はここで不十分にして誤解されて受容されたのみならず、文献一覧にすら掲載されなかった私の著作、『身体文化と国民形成』のみを念頭に置いているのではない。アイゼンベルク以外にも、いわゆる一般史の系譜からの研究の事例をあげることができる。それらはいずれにせよ、トゥルネンとスポーツという研究対象を扱っているが、しかしスポーツ科学とスポーツ史の先行研究をまったく、あるいはほとんど引証していない。ネガティブな評価において最も際立った事例は、スヴェンヤ・ゴルターマン（Svenja Goltermann）による『国民の身体』といった誤解を招くタイトルが付された拙劣な学位論文である。たとえ「身体」という概念がタイトルに使用されたとしても、所詮はトゥルネン史の先行研究を参照しない古い政治的なトゥルネン史である。この文献は、身体史、社会史、あるいは文化史をほとんどあるいはまったく問題にしていない。この点はこの著作が社会史家ヴェーラー（Wehler）によって指導されたがゆえに一層理解できないことである。第2の事例は、まさに歴史的、社会学的な流行テーマである「身体」と関連している。昨今、このテーマに関する夥しい数の著作が刊行されている。たとえば、『ある身体の歴史 1765-1914』という副題が付されたフィリップ・ザラジン（Philipp Sarasin）の多方面から称賛されている著作がそれである。彼はきわめて慎重にある身体[・]の歴史について叙述し、身体[・]の歴史全体について叙述しない。それにもかかわらず、こ

のような基本的な研究に対して以下のような期待をしてもよいだろう。すなわち、単なる（彼の）身体史以外からも受け入れられること、また他の身体史と身体コンセプトとの妥当な討論、たとえばスポーツ史ないし身体教育の理論と歴史の視点から書かれた身体[・]の歴史との討論が行われるだろうことである。残念ながら、このことは極めて希少であるか、端緒的なものにすぎない。

（8）

アイゼンベルクがスポーツ史家について語るとき、彼女は明らかにスポーツ科学の領域で大学の職にあるスポーツ史家の代表者とその周辺、すなわち歴史的なテーマを扱っているスポーツ科学とスポーツ教育学のインスティテュートや講座の関係者や博士学位有資格者などをイメージしている。しかしながら、これらの人びとはスポーツ史を研究している人びとのうち比較的限られた部分にすぎない。ドイツにおいては地域におけるスポーツ史学会、スポーツ博物館、歴史会館、協会そして団体の史料館、ならびに市、州そして連邦の史料館に属し、極的に活動している名誉職のスポーツ史家たちの活動分野がある。ドイツスポーツ学会のスポーツ史専門分科会は、ドイツにおける地方のスポーツ史研究の問題を、すでに何度もテーマ化し、またそれに関する学会大会も開催してきた。さらに、「ケルンドイツスポーツ・オリンピック博物館」、ベルリンスポーツ博物館、ライプツィヒスポーツ博物館、ならびにこれら「草の根歴史家」の研究を促進し、その成果を公表し、場合によってはコーディネートするニーダーザクセンスポーツ史学会（NISH）そしてバーデン・

ヴェルテンベルクスポーツ史学会の活動もある。2003年にはケルンにおいて「社団法人ドイツスポーツ博物館、スポーツ史料収集協会」が設立されたが、当協会は上記の課題を将来において代表し、一方において狭義の意味の大学におけるアカデミックなスポーツ史と他方において自由に活動している、いわゆるアマチュアスポーツ史家との仲介役として活動したいと考えている。ドイツにおけるスポーツ史家は「スポーツ」という研究対象に内在する独自の文化的力動性を看過しているのではないか、というクリスティアーネ・アイゼンベルクの問題提起に対しては、その力動性はこのような地方のスポーツ史家の研究の中で非常に特有な形で示されていると返答しなくてはならない。

(9)

また、アマチュアや独学者は本質的にスポーツ史という分野の発展に貢献し、また専門的な学問分野の発展にとって重要な研究や下準備を行ってきたことを忘れてはならないであろう。その際、非常に罵られ批判されたカール・ディーム（Carl Diem）のスポーツ史の著作は完全に上位の部類であり、またエトムント・ノイエンドルフも、その中に数えることができる。たとえこれらの研究が、現代の学問的な厳しい基準に耐えることができないにしても、しかしそれらは学問的な刺激を提供し、現代の専門的なスポーツ史研究が見逃せない基準を設定することができたのである。

(10)

スポーツの経済学的発展に重点的に取り組む

べきだというアイゼンベルクの奨励は、一面において支持できる。しかし、彼女はいずれにせよこの要求によって無駄骨を折っている。というのは、この視点は遠の昔に提案されているからである。たとえばポツダム大学におけるハンス・ヨアヒム・タイヒラーと彼の同僚たちが東ドイツにおけるスポーツの崩壊をまさに経済的観点から歴史的に探究し、証明しようとした努力だけをみてもわかることである⁵⁾。他方で、スポーツ史の経済化に対しては、スポーツ史の政治化に対して投げかけられた同様な理由から批判的に対応すべきである。スポーツのダイナミズムは、政治そして経済だけで解明することはできない。ダイナミズムはさまざまな条件とプロセスの相互依存のなかで、はじめて明らかにできるのである。

注

- 1) ケルン体育大学では、スポーツ史の2人の教授職がある。また、C3教授職は、奇妙なことだが、「古代」より正確にはエジプトのスポーツ史の専門家であめられている。
- 2) 例外がある。ポツダム大学のH. J. タイヒラーによって代表されている「スポーツの現代史」のためのC3講座である。ベルリン自由大学のゲルトルート・プフィスターが就いていたスポーツ史とスポーツ社会学講座（C3講座）は消滅した。またゲッティンゲン大学のアルント・クリューガーとミュンスター大学のミヒャエル・クリューガーはスポーツ科学ないしスポーツ教育学のC4教授として、優先的にスポーツ史に取り組んでいる。
- 3) たとえば、オリンピズムそしてオリンピック史の専門家、マインツ大学のノルベルト・ミュラーはそれに該当する。
- 4) 奇妙なことに、社会史の主唱者たるハンス・ウルリヒ・ヴェーラーの著作にはスポーツは見られない。このことは氏の『ドイツ社会史』の

3巻本のみならず、2003年に刊行された第4巻——そこでは1914年から1949年まで、つまりスポーツが社会的な大衆現象へと発展し、また大きな文化的、政治的な役割を演じた時代が論じられている——にもあてはまる。社会的発展の本質的な視点を包括し、理解したいという高い要求があった社会史は、私の考えではこの事実を黙殺することは許されない。

- 5) Vgl. TeichlerとReunartz (1999, 特に第Ⅱ章, S. 87-115)。そこでは東ドイツにとっての「高競技力スポーツの総コスト」——その展開は一方で東ドイツの経済的な弱さの徴候として見なすことができ、他方でそれによって東ドイツの破産を加速させることに貢献した——を国民経済的に算定しようという試みがなされている。

文献

- Bernett, H. (1996), *Nationalsozialistische Leibeserziehung. Eine Dokumentation ihrer Theorie und Organisation*. Schorndorf: Hofmann.
- Bogeng, G. A. E. (Hrsg.). (1926), *Geschichte des Sports aller Völker und Zeiten*. Leipzig: Seemann.
- Eisenberg, C. (1999), *English Sports und deutsche Bürger. Eine Gesellschaftsgeschichte 1800-1939*. Paderborn: Schöningh.
- Gasch, R. (Hrsg.). (1893), *Das gesamte Turnwesen*. Hof: Lion.
- Goltermann, S. (1998), *Körper der Nation*. Göttingen: Vanderhoeck & Ruprecht.
- Krüger, M. (1996), *Körperkultur und Nationsbildung*. Schorndorf: Hofmann.
- Neuendorff, E. (1932), *Geschichte der neueren deutschen Leibesübung vom Beginn des 18. Jahrhunderts bis zur Gegenwart*. Dresden: Limpert.
- Sarasin, P. (2001), *Reizbare Maschinen. Eine Geschichte des Körpers 1765-1914*. Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- Teichler, H. J. & Reinartz, K. (1999), *Das Leistungssportsystem der DDR in den 80er Jahren und im Prozess der Wende*. Schorndorf: Hofmann.
- Ueberhorst, H. (Hrsg.). (1972), *Geschichte der Leibesübungen*, Berlin: Bartels & Wernitz.
- Wehler, H.-U. (Hrsg.). (2003), *Deutsche Gesellschaftsgeschichte 1914-1949* (Band 4). München: C.H. Beck.

スポーツ史の対象範囲と政治的な目標設定 —ミヒャエル・クリューガーの「コメント」に対するコメント—

クリスティアーネ・アイゼンベルク* 著
有賀 郁敏** 訳

ミヒャエル・クリューガーは当然にも、私が国際比較研究を通じてスポーツ史の領域へ踏み込んだ一般史家の視点から論文を書いていることを確認している。彼自身、この点に対してスポーツ科学、より正確にはドイツのアカデミックなスポーツ科学の中で社会化されたスポーツ史家の立場に立っている。彼の関心事は、その学問的伝統（トゥルネン文筆家、「身体教育家」）をより深く考慮することである。これに対して、私の関心事、すなわちスポーツ社会学とスポーツ経済学という隣接領域、とりわけ新たな方向性としての「スポーツの経済学」との学際的共同の提案に、彼はほとんど応答してくれない。これでは読者には2人の執筆者間の意思疎通が混乱している、彼らは相互にすれ違っているといった印象を与えてしまうかもしれない。

なぜそうなるのか。ここで強調しておかなくてはならないのは、個人的な敵愾心ではないことである。というのは、ミヒャエル・クリューガーと私は数年来の旧知の仲であり、また一貫して友好的に相互に協力し合っているからであ

る。スポーツ史に関するわれわれの理解の2つの根本的な差異、すなわち異なったスポーツ概念とスポーツ教育学の役割に関する異なったイメージの中に、その根拠をよりよく見出すことができる。新たな学術誌『スポーツと社会』の創刊にあたり、この差異を明確に取り上げることが私には得策のように思われる。論争は議論を活性化させ、また学術誌はそこから利益のみうることができるのだから。

1. スポーツ概念

ミヒャエル・クリューガーは「コメント」の中で、当然のことながら近代スポーツのみならず、トゥルネンや「身体教育」の他の領域を含んだ口語的な意味における広義のスポーツ概念を使用している。それに対して私の論文では、それがアングロサクソンの伝統によって特徴づけられた国際的なスポーツ史のなかで使用されているように、狭いスポーツ概念の定義で始まっている¹⁾。この狭いスポーツ概念の中心には、スポーツ的な競争、すなわち、国際的に申し合わされ、監督されたルールにしたがって実施される競争が位置づいている。近代スポーツの国際的なコミュニケーション能力や異なった

* フンボルト大学英国研究センター教授

** 立命館大学産業社会学部教授

社会的な部分領域，すなわち社交と社会構造，政治と経済，モード，身体文化などを結びつけるスポーツの能力は，このメルクマールに基づいている。競争原理はすべての近代スポーツ原理にとって，またたとえば近代の体操競技にとって本質的なものである。それはしかし，19世紀の歴史的なトゥルネン運動，「身体教育」あるいはジョギングやエアロビクスなどの余暇活動にとってさほど重要な要素ではない。

ミヒャエル・クリューガーは，今やトゥルネン運動の歴史についてのエキスパートである。そして私のスポーツ定義が彼に気に入られないことは驚くにあたらない。むしろ彼がその異なった定義を明確に対象化し，可能ならば2つの評価の長所と短所を検討すれば，問題は生じなかったであろう。彼はしかし，そのことをしていない。彼は私の——そこではまったく普通ではない——定義に注意を向けることなく，また説明に際して暗黙のうちに独自のスポーツ理解を基礎に置いている。それによって彼は無意味なコメントを開始してしまった。

クリューガーはドイツのスポーツ史の他の多くの同僚たちとともに，通常のスポーツ概念とは異なるものへ，「議論するため」だけでも入り込むための準備が不足している。わたしはこのことを論争の中で再三経験してきた。根拠について熟考することが望まれる²⁾。しかしながら，この無関心の結果は明らかである。ドイツのスポーツ史が近代スポーツを対象相関的な概念で分析することを理解しないのなら，スポーツ史は近代社会にとってのスポーツ的競争が果たす展開の衝撃や国際関係を依然として認識できないであろう。とりわけ，国際的な次元が示しているスポーツそのもののみならず，たとえば個々の国民経済，国際経済，メディアそして

文化活動とも関連している現代の商業化傾向を適切に探究することに成功しないだろう。すでに経済学者がスポーツに関して理論的な分析を誘発されているように見え，特殊な「経済学」が展開されようとしているとき，スポーツ史家に属する「標準的経済人」が，自分はトゥルネン場の活動のようにスポーツマーケットを考察できるなど考えるべきではない。

2. 教育学的衝撃

ミヒャエル・クリューガーは，スポーツ史家としてのみならず，スポーツ教育学者としても理解されている。それゆえ，とりわけ彼は19，20世紀のトゥルネン文筆家と身体教育者の歴史的伝統を高く評価する。今日の歴史家はそれらの著作を，おそらくその史料的価値のために援用する。加えてスポーツの真価に関する私の証拠をめぐる議論の中で明確になっているように，クリューガーの教育学的衝動は政治的・教育学的である。彼はそれを経済学の領野から政治の領野へと移し変え，例として第三帝国における自らの行為をスポーツの独自世界の性格への参照指示によって，後になってから正当化しようと試みたドイツのスポーツ連盟の役員たちをあげる。この正当化は「イデオロギー」であったことをハヨー・ベルネット，ハンス・ヨアヒム・タイヒラー，ロレンツ・プファイファーそしてドイツにおける『スポーツの現代史』の他の代表者たちは，すでに数十年前に明らかにしたとクリューガーは考える。それゆえドイツのスポーツ史では，独自世界の証拠は克服されている，と。また，それにもかかわらずそれを取り上げた者たちを，彼は政治的に単純なスポーツ史研究を弁護していると非難する。

私は歴史家として定義問題に対する無関心以上に、試みとして独自世界の根拠と相互に根本的に取り組むことを拒絶する態度が理解できない。なぜより古い解釈をより新しく再考すべきではないのか。歴史的な考察は経験的に「時代精神」によって影響されるのだから、むしろこのような検討が定期的に実施しなくてはならないのではないのか。クリューガーによって提示された『スポーツの現代史』の研究に際して、いずれにせよ私にはそのことが必須のように思われる。というのは、イデオロギーとイデオロギー批判はせいぜいのところ、それが存在する時代に関する利害関係を映し出しているからであり、基礎となる社会構造への帰納的推定を可能としないからである。すなわち、仮にスポーツ連盟役員によるスポーツの独自世界の性格への参照指示が、1945年以降、ナチス体制との共同ないし協力の正当化に貢献したとしても、しかしそれは主張された実情、独自のルールにしたがって——そして独自の必要のために——機能した社会的局面の実態が示されているといえるのである。第三帝国におけるスポーツと政治の関係に関する私の独自の研究は、多くの点からこの推察を確認している（Eisenberg, 1999, 第Ⅳ章）。またスポーツとファシズムないし独裁政権との関係に関する国際的な研究でも、一致して独自世界の論拠の裏づけに貢献しているのが分かる³⁾。全体的にみれば、時代の診断は広範な考察を拠り所にして、次のような仮説を生み出す手がかりを提供しているように思われる。すなわち独裁体制下ではスポーツと政治との関係において、しばしば引用される政治によるスポーツの道具化が、それとは逆のスポーツによる政治の道具化よりも決定的ではなかったということである。

このような研究関心を「政治的に不適当なもの」「教育学的に疑わしいもの」として思う者は、政治的教育学から離れるのがよいだろう。政治的公共性における仲介の可能性と限界を考慮して研究が実施されたり、あるいは中止されたりするわけにはいかないからである。いずれにせよ、私は一貫して次のように考えている。すなわち、興味を持つ人びとにとって最も有益で疑いなく「教育学的に価値の高い」情報は知らされるべきこと、そして近代スポーツは、事情によってはその独自世界の性格を制約的な政治条件下においても保持することができることである。同様に人びとには、なぜそれが可能なのかの説明がなされなくてはならない。このような情報をきめ細かく提供することは、スポーツ史の中心的な課題であると私は判断する。さもなければ、一体誰がその課題を解決するのであろうか。スポーツ史がこの課題を拒否するのであれば、それはスポーツの社会的影響力、またそれとともに自由な潜勢力をも失うことになるであろう。

注

- 1) これに関する詳細は Eisenberg (2002)。この論文は、タイヒラーの文献（2003）に掲載された講義に基づいている。
- 2) ここでは、疑いなく、狭義そして広義のスポーツ概念の間の違いはドイツのスポーツ史の決定的な局面で不確定になった点が挙げられる。なぜならば、スポーツ、トゥルネンそして軍事スポーツを「体育」という概念の下で取りまとめようとする連盟役員、教育学者、政治家そして軍人がタイムリーに存在していたからである。この譲歩は1920年代のドイツにおけるスポーツ科学の編成局面でも基礎づけられ、また第2次世界大戦後のケルン体育大学の設立に際して、再度更新された。それは近代の社会科学と

その概念性は、さしあたり、問題の外に置かれたままという結論をともなった。身体運動のコンセプトに関しては、以下を参照。Eisenberg (1999, S. 283ff., ならびに第VI-Ⅷ章)。学問史的結果に関しては、Eisenberg (2002)。

- 3) 関連した叙述は欠落している。Vgl. Key (2001). 点在了証拠は、とりわけ以下の概説的試みにある。Krüger (1999) そして Riordan (1999)。フットボール史のなかで素描された診断は注目されている。つまり戦間期において、民主主義を重視し、スポーツを個人の事柄として見なしていたそれぞれの「フットボール国民」は、国際的に二流、三流な者へなり下がった。そこにおいて国民的な団体が独裁者の援助を得て補助金を手に入れ、また準政党的な大衆組織にサポートされて聴衆を動員する、「フットボール国民」が台頭した。Vgl. Eisenberg (1997) 所収の Riordan と Archetti の論稿参照。Giulianotti & Finn (2000) ; Marsch (1999)。

文献

- Eisenberg, C. (1997), *Fußball, soccer, calcio*. München: Deutscher Taschenbuch-Verlag.
- Eisenberg, C. (1999), *English Sports und deutsche Bürger. Eine Gesellschaftsgeschichte 1800-1939*. Paderborn: Schöningh.
- Eisenberg, C. (2002), Die Entdeckung des Sports durch die Geschichtswissenschaft. *Historical Social Research*, 27, 4-21.
- Giulianotti, R. & Finn, G. P. T. (2000), Epilogue: Old Visions, Old Issues — New Horizons, New Openings ? Change, Continuity and other Contradictions in World Football. In R. Giulianotti & G. P. T. Finn (Hrsg.), *Football Culture. Local Contexts, Global Visions* (S. 258-259).
- Keys, B. J. (2001), *The Dictatorship of Sport: Nationalism, Internationalism, and Mass Culture in the 1930s*. Ph.D. Thesis Harvard University. Ann Arbor/ MI: UMI Microform (No. 301 1402).
- Krüger, A. (1999), Strength through joy. The culture of consent under Fascism, Nazism and Francoism. In J. Riordan & A. Krüger (Hrsg.), *The International Politics of Sport in the Twentieth Century* (S. 67-89).
- Marschik, M. (1999), Between Manipulation and Resistance: Viennese Football in the Nazi Era. *Journal of Contemporary History*, 34, 215-229.
- Riordan, J. (1999), The impact of communism on sport. In J. Riordan & A. Krüger (Hrsg.), *The International Politics of Sport in the Twentieth Century* (S. 48-66). London: Spon.
- Teichler, H. J. (Hrsg.). (2003), *Moden und Trends im Sport und der Sportgeschichte*. Hamburg: Czwilina.